明日への道標

終始一貫 命の杖に
―北里柴三郎 役に立つ医道―

㈱日本設備工業新聞社
代表取締役社長　高倉克也

2024年度に予定されている紙幣改定で千円札の肖像は北里柴三郎（1853－1931）に決定した。新型コロナウイルス感染症が世界中で猛威をふるっている現在、感染症医学の先駆者である北里の業績はもっと知られてもいいだろう。

近代医学の黎明時にドイツに留学した北里は破傷風菌の純粋培養法と血清療法の開発で世界的に脚光を浴び、ノーベル賞の候補者にもなった。帰国後は終生の恩人となる福沢諭吉の援助で研究所を設立し、ペスト菌を発見するなど予防医学の礎を築いた。社会に役立つことを肝に銘じ、慶応大学医学部、日本医師会、医療機器会社の創設者としても活躍している。

しかし華々しい経歴の背後には国や母校・東大との烈しい確執が孕(はら)まれていた。頑固で負けず嫌いの北里は独自の医道を貫いていく。

医者の使命を力説する

北里は現在の熊本県阿蘇郡小国町で代々庄屋を務める名家に生まれた。武家の出身である母は躾にきびしく教育熱心で北里は８歳から２年間、親戚の家に預けられ、漢学者の叔父から四書五経を教わった。ついで母の実家に預けられ、儒学者の塾に通って漢籍や国書を４年間にわたって学んだ。

15歳で細川藩の藩校・時習館に入寮し、学問や武芸に励んだ。将来は軍人か政治家を志望していたものの、両親の意向で熊本医学校に入学する。恩師となるオランダ人医師マンスフェルトと出会って医学の大切さに目覚め、特別にオランダ語を教わり、やがて通訳を務めるようになった。

北里柴三郎

23歳で上京し、東京医学校（東京大学医学部）に進学する。在学中は教授の論文を批判するなど学校当局と折りあいがわるく何度も留年した。

血気さかんな北里は社会活動を行う学生組織・同盟社を結成し、毎週土曜日に演説会を開いていた。演説会ではみずから執筆した「医道論」を力説する。「医者という地位について勉強せず、自分の生計を目当てに病気を治すことで満足する者がいる。今から医学に入る者は大いに奮発勉励し、この悪弊を捨て医道の真意を理解しなければいけない」として「医者の使命は病気を予防することにある」「人民に健康法を説いて身体の大切さを知らせ、病を未然に防ぐのが医道の基本である」と予防医学を提唱した。

30歳でようやく医学士となり、結婚もした北里は予防医学を実践するために内務省衛生局に就職する。1885年、同郷で東京医学校の同期生である東大教授兼衛生局試験所長の緒方正規の計らいでドイツのベルリン大学に留学し、結核菌やコレラ

菌を発見した世界的な細菌学者であるロベルト・コッホに師事した。留学生にはのちに文豪として名を轟かす陸軍軍医の森鴎外も含まれていた。

忘恩の輩として四面楚歌

尊敬するコッホの期待に応えようと北里は破傷風菌の研究に打ち込んだ。破傷風菌は傷口から侵入し、体内で増殖する毒素によってけいれんや激烈な痛みを引き起こす。さしたる治療法もなく死に至らしめる難病として恐れられていた。

精魂を傾けた研究の成果として1889年、世界で初めて破傷風菌の純粋培養法に成功する。翌年には毒素に対する免疫抗体を発見し、さらに名声を高めた。とはいえ北里はそこで満足せず「研究は目的の如何にかかわらず、実際に役立つ医療・予防の上に結実されるべき」という信念のもとに菌体を少量ずつ動物に注射しながら血清中に抗体を生みだす血清療法を確立する。血清療法は効果を発揮し、破傷風による死亡率は激減していった。

確信を深めた北里は血清療法をジフテリアに応用しようと同僚のベーリングと連名で研究論文を発表する。この研究が第１回ノーベル生理学・医学賞の最終候補に残ったものの、研究を主導した北里ではなくベーリングだけが受賞した。当時、圧倒的な権威を誇っていたドイツ医学界の全面的なバックアップでベーリングの単独受賞となったなどの諸説が伝えられている。

ノーベル賞は逃したものの、北里の実力は高く評価され、ケンブリッジ大学など欧米の各大学や研究機関から好条件で誘われた。だが日本の脆弱な医療体制の改善と伝染病の予防に意欲を燃やす北里はこれを固辞し、帰国する道を選ぶ。およそ７年ぶりの帰国に際してドイツ皇帝は明治天皇に北里を絶賛する書簡を送り、外国人として初めてプロフェッソル（大博士）の称号を贈った。

1892年、40歳で帰国した北里は内務省衛生局に復職する。ところが周囲の反応は冷たく研究室さえ与えられなかった。

ドイツ滞在中、留学の便宜を図ってくれた緒方の研究を批判したことが忘恩の輩（やから）として非難の的になっていた。北里は年間３万人が死亡する脚気（かっけ）の原因を細菌と断定した緒方の論文を公然と否定していた。実際のところ脚気の原因はビタミンB１の不足による栄養障害で北里の指摘はまちがっていなかった。だが東京医学校を中心に北里に対する反発は根強く同校出身の森鴎外も北里を批判する論文を発表する。それでも北里は自説を曲げず四面楚歌の状況に追い込まれた。

福沢諭吉の救いの手

救いの手は意外なところから差しのべられた。北里に同情した上司が慶応義塾創始者の福沢諭吉を紹介してくれたのだ。福沢は北里と語りあって「この男に活躍の場を与えないのは国家の損失だ」と確信する。福沢に請われて豪商の森村市左衛門らが多額の寄付を行った。北里は1892年、芝公園に私立伝染病研究所を設立する。

福沢は感染を危惧する地域住民を説得しようと研究所の近くに子息を住まわせた。翌年、広尾に全国初の結核専門病院・土筆ヶ丘（つくしがおか）養生園を開設し、運営を北里に委ねた。商才のある事務長を送り込み、研究所の費用を捻出する。

1894年、政府の依頼でペストが流行している香港に赴き、原因調査の過程でペスト菌を発見する。帰国後、ペストの感染予防のために患者の隔離、検疫、上下水道の整備などを進言した。ペスト菌はネズミを介して感染することから「一家に一匹、猫を飼うとよい」と呼びかけた。

研究所ではドンネル先生という仇名で慕われていた。ドンネルはドイツ語の雷に由来している。うるさい雷おやじでありながら人情家でもあり、黄熱病の研究で知られる門下生の野口英世が渡米する際、北里が紹介状を書いた。門下生には口癖のように「研究だけをやっていたのでは駄目だ。それをどうやって世の中に役立てるか考えよ」と諭していた。

1899年、研究所は国営化され、内務省の管轄となる。このとき福沢は「政府はいつ気が変わるかもしれないから、決して油断せず金を蓄えておくように」と忠告し、２年後に他界する。福沢の死に際して北里は「実に師父を喪いたるの感あり」と嘆き悲しんだ。

やがて福沢の杞憂は現実のものとなる。1914年、政府は所長の北里にいっさいの相談もなく研究所

の所管を文部省に移し、北里と対立していた東大の下部組織にする方針を明らかにした。伝染病の研究は内務省が所管する衛生行政と一体のものでなければならないと考えていた北里にとって青天霹靂の出来事だった。福沢から受け継いだ独立自尊の精神に基づき北里は即座に所長の辞任を申し出る。すると北里の後を追って所員全員が一斉に辞表を提出した。きわめて異様な事態は伝研騒動として世間の話題になる。

恩顧に報いるために

辞任後ただちに北里と所員たちは北里大学の母体となる私立北里研究所を立ち上げる。当面の費用は土筆ヶ丘養生園の利益で賄った。福沢は死してなお北里を守りつづけたといっていいだろう。新研究所の志気は高く狂犬病、インフルエンザ、赤痢、発疹チフスなどの血清開発に精を出す。

1917年、福沢の多大な恩義に報いるために慶応大学医学科（医学部）を創設し、初代医学部長兼付属病院長を引き受ける。教授陣にはハブの血清療法で著名な北島多一や赤痢菌を発見した志賀潔など錚々たるメンバーを送り込んだ。

同年、全国規模の医師会として大日本医師会を結成し、初代会長に就任する。その一方で1921年、それまでドイツ製に頼っていた体温計の国産化をめざし、みずから発起人となってテルモ株式会社の前身となる赤線検温器株式会社を設立する。テルモはドイツ語で体温計を意味している。大日本医師会は1923年、医師法に基づく日本医師会に衣替えし、初代会長として舵取りにあたった。

晩年は麻布にある自宅の庭に大きな鳥小屋をつくり、孔雀などを飼って可愛がった。鳥が死ぬと解剖して原因をたしかめずにいられなかったという。脳溢血によって78歳で波瀾に充ちた生涯を終え、青山墓地に葬られる。

座右の銘は「終始一貫」で医者は「国民にとっての命の杖とならねばならない」と語っていた。

慶応の鎌田栄吉塾長から医学部を新設したいとの相談を受けたとき、北里は「福沢先生から受けた恩顧に報いるのはこのときである」と福沢の悲願達成に情熱を燃やした。設立後のことも気遣い「もし経営不振になったら北里一門を挙げて支えるつもりだ」と鎌田塾長に伝えている。

初代医学部長となって1928年に退任するまでの十余年、給与その他いっさいの報酬を固辞し、無償で職務をまっとうした。

月刊コアをおすすめします！神奈川県相模原市・㈱小池設備の女性社員の皆さん